
我が学校の怪談

吉善

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が学校の怪談

【Nコード】

N7816M

【作者名】

吉善

【あらすじ】

某小学校。

入学式早々、校長先生の口から「この学校にはお化けがいる」と発表された。

騒然となる新一年生達。

そんなある日、一人で歩いていた女の子がお化けに襲われ…。

そのお化けの存在に隠された意味とは…？

そして、それを入学式で話した校長の真意とは…？

ちよっぴり怖い、ちよいホラーでお届けします。

(前書き)

初めまして、生まれて初めて小説を書きます。「吉善きちよし」です。
昔から学校の怪談が好きで、この作品を完成させる事ができ、とても嬉しいです。

ちょっぴり怖い、ちょいホラーですので、皆様お楽しみください。

某小学校の入学式。

女性であり、さらには弱冠28歳でありながらその椅子を手に入れた現在の校長は、完全にこの小学校を牛耳っていた。

そんな校長の入学式の挨拶は、決まってこのような話で締めている。「最後に、ここで校長先生から、みなさんに大事なお知らせがあります。実は、この学校では、一年生を食べようとするお化けがいます。まだ食べられた人はいませんが…。一年生は、出来るだけお友達と一緒に学校の中を歩いてください」

この校長先生のお知らせに、小学校の一年生は大騒ぎとなった。

「すっげー。この学校お化け出るんだってよ！」

「あたしこわーい」

「お化けなんかいないんだって、大人がウソついているだけだよ」

「もし出たらどうしたらいいんだろう」

お化けを信じる子、信じない子。

もし出会ってしまったら逃げると言う子、戦って追い払うと言う子。男の子も女の子も、みんなお化けの話題で持ちきりとなった。

そんな入学式の日から、一週間がたったある日。

水色のリボンで髪を束ねた一年生が一人、理科室に向かっている最中の出来事だった。

「どうしよう…。みんな先に行っちゃったよ」

その女の子は普段は友達と一緒にのだが、いつも準備が遅いためついには友達もしびれを切らし、先に理科室へ向かってしまったのだ。一人で理科室に向かってしていると、廊下を裸足で歩く時の音が、背後から聞こえてきた。

女の子は振り返ろうと思ったが、ふと、入学式の時の校長先生の話の思い出した。

「一年生を食べるお化け」

思わず足が止まってしまった。

「う、うそ……！お化け……？」

逃げ出したくとも足がすくんでしまっている。

ヒタ……ヒタ……ヒタ……。

足音が一步一步近づいてくる。

ヒタ……ヒタ……。

明らかに、女の子の方へ近づいてくる。

…ヒタ。

足音が止まった。

その位置からして、女の子の真後ろ一步手前。

女の子の体は、恐怖で固まってしまった。

辺りが静まり返る。

理科室にいる、友達の声がかすかに聞こえてくる。

（助けて……。誰か……！）

心の中で助けを求めるものの、友達が駆けつけてくれる訳もなく、時間だけが過ぎていく。

体が硬直してから数秒後、女の子の肩に何かが落ちてきた。

生暖かい何かが、肩に落ちてきたのだった。

ゆっくりと肩を見ると、そこには水が一滴垂れたような跡があった。

振り向いてはいけない。女の子は、頭では分かっていた。

だが、振り向いてしまった。

足音や気配は、もしかしたら気のせいなのかもしれない。

肩に落ちてきた水も、雨漏りか何かかかもしれない。

自分自身を安心させたいというほんのわずかな気持ちだが、その女の子を振り向かせてしまったのだった。

女の子の後ろにいたものは……。

黒くて長い髪の毛を前に垂らした女性だった。

髪の毛は、先ほどまで水の中にいたかのようにびっしょりと濡れており、毛先からは水滴が垂れ落ちている。

顔はよく見えない。

だが、前髪の奥に見える目は見開かれており、女の子の目を見ている事だけは分かった。

女の子は声が出なかった。

その女性と目が合ってしまったため、蛇ににらまれた蛙となってしまったのであった。

数秒間、両者とも固まっていた。

今度は、先に動いたのは女性の方であった。

「美味しそう」

そう言うと、女性は口角を上げながら口を大きく開いた。

その唇には真っ赤な口紅が塗られており、まるで口裂け女のようにであった。

女性が右手で女の子のあごをつまもうとした。

その瞬間。

「お、お化けー！」

女の子は大声を上げ、後ろに倒れ込んでしまった。

「食わせるお…。食わせるおー！」

お化けは、女の子を捕まえるかのように、上に覆い被さろうとする。女の子はあわてて逃げた。

震える足で立ち上がるものの、2、3歩だけ走った所で前のめりに転んでしまった。

「食わせる、食わせるおー！」

お化けの手が、女の子の顔に向かって伸びる。

その時だった。

「また出たなお化け！」

ホウキを持った六年生の男の子が、女の子とお化けの間に割って入った。

その男の子はどこかで女の子の悲鳴を聞きつけ、駆けつけたのだった。

「六年生…！食事の邪魔をするのか！」

「う、うるせー！！昔はよくも食おうとしたな！」

男の子がホウキを振って立ち向かう。

だが、お化けに怯えているのはその男の子も一緒に、何度ホウキを振っても、まともにお化けには当たらない。

だが、ついにそのうちのー振りがお化けのこめかみに命中した。

「うぐっ！」

お化けはよろめいた。

「ま、参ったか！」

「ちくしょおお……」

そう言つと、お化けは背を向け、走って逃げてしまった。

「大丈夫？」

「うん……」

男の子は、女の子のもとへ駆け寄った。

四月某日、二時間目の授業が始まる直前の出来事であった。

その日の放課後、校長室。

教頭先生は、校長先生に異議を申し立てていた。

「校長先生！いくら私でも、いい加減堪忍袋の緒が切れましたよ！」

「……何の話ですか？私には全く見当もつきませんが」

「とぼけないで下さい！例の「自作自演の学校の怪談」の事ですよ」

「……やはりその話ですか」

校長先生は、こめかみの部分に打撲用の塗り薬を塗っていた。

「当たり前ですよ校長先生！いくらなんでも、今回はやりすぎです！毎回上級生が近くを通りかかるのを確認してからやっているからまだマシなものを……」

「分かっていますよ。私も今回は度が過ぎたと反省しています」

「全く……ところで、いい加減に教えて下さい。なぜ校長先生が自らお化けに扮してまで、一年生を怖がらせるのですか」

「なぜ私自らお化けに扮するのか…。ハ、もしかして、教頭先生もやってくれるのですか！？お化け役！私は貞子に口裂け女に濡れ女ですから、教頭先生は…」

「やりませんよ！何を考えているのですか。私が知りたいのはそっちではなく、なぜ一年生を怖がらせるのかです」

「ああ、そっちですか。まあ一言で言えば、学ばせるためですよ」

「はあ…。学ばせるといつても、何を学ばせるのですか？私にはどうも、一年生達を怖がらせているようにしか見えないのですが」
校長先生は得意げに笑った。

「…私は幼い頃、ド田舎で育ったんです。その当時流行っていたゲームなどの遊びの情報なんか一切入ってこないくらいの超ド田舎です。遊びと言えば、必ず友達と鬼ごっこしたり、ヒーローごっこしたり。特に小学生の頃なんか、一度も一人遊びなんかしたことが無かったのです」

「はあ…」

「ろくに勉強もしないバカばかりでしたけど、強い絆は今も消えていません。私が教師になると言いだした時なんか、それぞれの得意教科を私に教えてくれました。…とは言っても、一年もしないうちに、みんなのテストの点を超えちゃいましたけど」

校長先生は、幸せそうな顔で思い出し笑いをした。

「…そうですか。それで、このお化け騒ぎと何の関係があるのですか？」

校長先生は、顔を真顔に戻した。

「失礼しました。ここからが本題です。私が教師になる前の研修で初めて都会の学校に訪れた時の事です。私は目を疑いました。人の苦しみや痛みを知らない子供が多く、イジメや暴力も多すぎました。…私は別世界にでも飛ばされたのかと思いましたよ。少しでも何とかしようとして、一番ひどいイジメをしていた男の子を更正させようと必死に努力しました。研修最後の日、ついに私はその男の子のイジメを止めさせたのです」

「…ほう」

教頭先生が、珍しく校長先生をたたえるような目で見つめた。

「イジメた方が謝った時も印象的でしたが、イジメられた方が私に「助けてくれてありがとう」と言ったのが、特に印象的でした。そこで私は思ったのです」

「…何をですか？」

「人はイジメられて、初めてイジメの愚かさを知ります。人に殴られて、初めて人の痛みを知ります。それと同じように、人に助けられて、初めて人を助ける素晴らしさを知ります。私は、教育とはそういう事を学ばせるものなのだと思うのですよ。教頭先生」

五年後、またこの学校で、お化けに遭遇した一年生が一人。

叫び声を聞きつけた六年生は、水色のリボンで結った長髪をなびかせ、お化けに立ち向かった。

「お前は、昔食べようとした一年生…！」

「そうよお化け！もう昔の私じゃないんだからね！」

その六年生は逃げなかった。

むしろ、トイレから拝借してきたであろう木製のデッキブラシを武器に、逆に襲いかかってきたのだった。

（せ、生徒の武器もちよつとだけ進化している…！）

生徒に追いかけられるお化けに扮した校長は、自分の教育の成果を実感している。

そして今日も校長は、次に怖がらせる生徒を見つけるため、学校中を徘徊しているのであった。

(後書き)

改めまして吉善きちよしです。

僕の初作品「我が学校の怪談」はいかがでしたでしょうか？

「なんか校長先生が出てくる怪談のやつ」といったものでいいので、皆様の印象に残っていれば幸いです。

見てくださった方からの感想をいただければ非常に励みになりますので、宜しければお願いします。

最後までご覧いただき誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7816m/>

我が学校の怪談

2011年4月24日05時13分発行